

和装本の修復と保存

本田 瑛子

○「製本について（四つ目綴）」

和本の綴じ方には何種類もありますが、ここでは一般によく目にする「四つ目綴（明朝綴）」を紹介します。

修復した本を綴じ直す時には、元の綴じ穴を利用して中綴、糸綴の順に製本をします。以下、順を追ってみていきましょう。

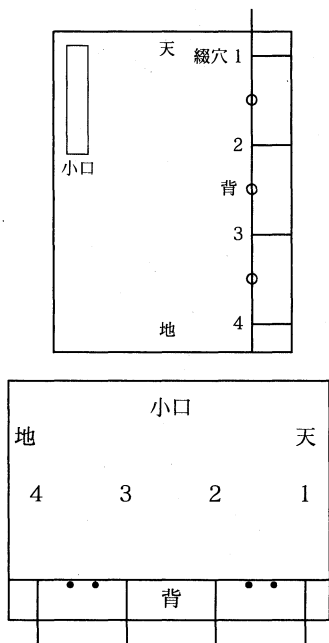


図 1

1 見返し—遊び紙—本紙—遊び紙—見返しの順に重ねて
プレスしておく。

これは、プレスすることにより本を扱いやすくし、正確な位置に綴穴がくるようにするためです。

2 綴じ穴をつくる。

背の方を綴じるので本紙をよく整えて、ピンの平な方を下にして小口をしっかりと挟み、目打ちで元の中綴穴、糸綴穴を全体に通す。

3 こよりを作り中綴りする。

元のこよりが使える場合は利用し、使えないときはなるべく同じ幅の和紙で作ります。中綴じは本を丈夫にして、本紙がずれるのを防ぐので製本がやりやすくなります。出来上がったこよりを、板のうえ等で掌を使ってしっかりとよりをかけると強度を増します。

「新しく中綴じをする場合」

組になる穴どうしの間隔は一センチ弱とします。広すぎると中綴しても本紙が締まらず全体に歪みが出るためです。位置は上図のように綴じ穴「1と2」「3と4」の中央で、糸綴穴の線と背の外側線の中央が目安となります。

こよりを通したら、二ヶ所共中央よりの穴の上で一重結びにし、一捻りして目打ちの背で叩いて穴を埋めるように平にし、表紙に影響が出ないようにします。

※ かつて修復した書籍の中で、中綴して結んだこよりの先を開いてしつかり糊付けしてあり、その場所が虫に食べられているものがありました。

糊が多く付いて硬くなった所は虫が好むので、調書に記録しこよりに糊は付けないで仕上げました。なるべく原型に近い修復が望ましいのですが、虫食い予防や耐久性を考慮して違う修復の方法をとる場合もありますので、状態を記録に詳しく記しておきます。

4 糸綴をする。

表紙、裏表紙を重ねて綴穴を合わせて本紙にとめます。

綴じ糸の長さは、天・地の寸法の三倍を目安に調整します。最後の糸の留め方には、こぶ綴となめ綴（薄い本に用いられる）とがあります。こぶ綴じの場合、絹縫糸9号では細過ぎてこぶが抜けやすくなりますので、閲覧の耐久性を考えると少し太めで絹一〇〇%の穴かがり糸16号が良いかと思えます。以下、糸綴の際の留意点を思いつくままに記しておきます。

○原本の綴じ糸が使えればなるべく生かす。

ただし、きれいに残っているようでも実際解体してみると、劣化して角に当る部分からバラバラに切れる場合があります。

○綴糸が使えないときでも、元の糸は保存しておく。

元の糸を調書に貼り記録しておきます。あるいは、復元した本の見返しなどにも付けておくと、閲覧時にもすぐ分かり研究者にも正しく伝わります。

穴かがり糸は色の種類も豊富に揃っているので、原本の綴糸に近い色を選びましょう。

○練習用には絹一〇〇%の8番・20番・30番の白黒の糸で良いと思えます。（綿の糸は番号が少ない順に太くなります）

○針は本の厚みによって何種類か揃えておくと作業がしやすいでしょう。

針の先端をヤスリか石でほんの少し丸みを付けて潰すと、綴じるとき本や糸を傷つけずに綴じ易くなります。針の大きさは、厚地用の手縫い針など5センチ位のものが使いやすいようです。

○右手に針を持ったら左手の指先で綴糸を常に押さえながらすると、綴糸が緩まず仕上がりがきれいになります。

○本は持ち上げないで、常に目打ち台か机の上に平らな状

態に置いて綴じると、本に歪みが出ずきれいに仕上がります。

5 綴糸の手順が分かりやすい資料として、次の本を挙げておきます。

中藤靖之著『古文書の補修と取り扱い』（雄山閣出版社）

糸綴を終えたら全体を見て、綴糸の縦線と背の横線がまっすぐになっているか、表と裏を確かめておきましょう。曲がったところは目打ちを使って直します。綴穴のめくれた部分も内側に入れ込み整えておきます。

6 糸綴が済んだら見返しを糊付けします。

記録したとおり元の状態になるよう表紙と裏表紙に糊付けします。余白や本紙に糊が付かないように、乾くまでは和紙を挟んでおくとういでしょう。

〔見返し糊付けの例〕

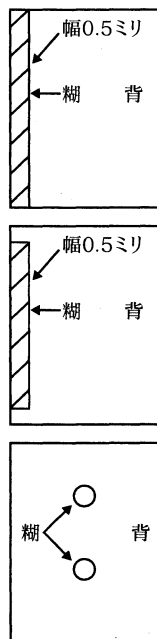


図2

7 製本が出来たら板で挟み重しをかけて仕上げます。

文献には形状の違いや綴じの違いも様々にあり、又修復によって違ってくるばあいもあります。基礎をしっかりと学び地道に取り組んで努力を積んでいけば、一点一点に対して適切な判断ができるようになると思います。

練習用として、厚みが一・五センチ位の本を一冊作っておくと、繰り返し練習が出来て便利です。大きさは半紙紙で紙質を考え、遊び紙と見返しを本紙の表と裏に付けておきましょう。

○「補修について」

製本の次は、虫食いなどにより痛んだ文献の修復方法について述べておきましょう。おおよそ次のような工程を踏みます。

1 傷んだ文献に対して、まず十分観察し調書を詳しく取ります。

元の形状をなるべく残すために「最小限の修復」を基
本に置き、「保存と活用」を念頭にそれぞれに修復の方
法を適切に判断します。

文書の形状や紙質、傷みの程度などにより修復の方法
が細かく違ってきます。今まで目にした本の中から上げ
てみましょう。

- ・虫損（大小あり形も様々）
- ・欠損
- ・破損（亀裂）
- ・染み（長年たつと欠損に繋がります）
- ・かび（欠損に繋がりに収蔵されている環境によつては広がる心配もあります）
- ・紙がふけている（染みやかびが原因の場合もあります）
- ・雨漏りか虫の糞などで板状にくっ付いている
- ・柔らかい紙質に磨耗が見られる

・袋綴じの中にまでほこりがざらざらしている本
本の被る損傷は、実にさまざまです。また、取り上げた

例が、一冊の中に幾つか重なっていることがあります。
状況により虫損直しと裏打ちを組み合わせたたり、染み抜

きをしたあと裏打ちしたりと修復も多様化してきます。

2 予備的な作業

柔らかい刷毛で全体の埃を払うだけでも、耐久性が
違ってくると思います。丁と丁との間や、袋綴じの袋の
中に、虫の死骸や虫除けに挟んだと思われる木の葉が何
枚も挟まっていることがあります。中には葉っぱの形に
染みになっているものもありました。

巻物、軸、絵図などは取り扱いに注意が必要です。こ
うしたものは、修復にほぼ熟練してないと破壊に繋が
る危険性があります。紙を何枚も継いである絵図などは
継ぎ目が剥れやすいので、濃い糊で「指し糊」をし応急
措置を施しておいた方がよいでしょう。このとき継ぎ目
に描いてある線や絵が、ピッタリ合うように仕上げます。
使つてある顔料によつては、一定の色の箇所だけに
バラバラに亀裂が入ることがあり気が抜けません。色が
使つてある部分の亀裂の修復には、表の色に合わせた和
紙を食い裂いて裏から埋め、もう一枚を今度は裏の色に
合わせて広く食い裂いて上に重ねると、表からも裏から
も不自然にならず強度も増します。

巻物や軸は絵が描いてあるところに、極薄の和紙を挟
んで少し緩く巻くと、擦れや磨耗がいくらか防げると思

います。

絵図は折りたたむので和紙を挟むと厚くなり、折り目に負担が掛かるので注意しましょう。広げるとき、元の形をしっかり確認しないと折れ線が変わり、傷みや継ぎ目の剥がれにつながります。

外れた継ぎ紙を合わせる場合は、字面に対して右が上になります。紙と紙との微妙な位置関係を確定するためには、虫食い穴が参考になることがあります。

いろいろな色の和紙の染紙がありますが、そのままでは鮮やか過ぎて不調和をきたし、使えないものもあります。A3位の広さに切り墨、藍、もしくは墨と藍を合わせたもの等で、濃度を変えていろいろ一度に沢山染めて寝かせておくと、表紙や色が付いた文献の修復にとても重宝します。

3 虫損直し

丁の全面に裏から補強の紙をあてる、「裏打ち」は道具や場所も技術習得も大変ですが、「虫損直し」は取り掛かりやすく、練習を積んだら役に立つことが多いので述べて見ます。

(1) 糊の準備

虫損直しのためだけに沈糊（純粹な小麦澱粉）を鍋で

練るのは大変手間が掛かります。裏打ちと違い、虫損直しは糊の量もほんの少しあれば十分です。糊付きも良く必要な量が手軽に準備できる、乾燥した海草のふ糊を使います。

作り方を述べてみましょう

①適量を水で30分程ふやかして、レンジにかける（殺菌作用と粘着力を増すため）。1分もあれば十分でしようが、吹きこぼれる寸前で止めなければなりませんので、中の様子が窺えるレンジが便利でしょう。

②ガーゼで漉してぬるま湯で薄めながら濃度を見ます。乾いた掌に一、二滴取り、両手を擦り合わせてそつと手を離すと、糊の粘着力が分かります。本紙の紙質が厚いものや、水分を吸水しやすい紙のときは少し濃く、本紙の紙質が薄いときは少し薄く調整します。

(2) 和紙の準備

本紙の色合いに近いもので、本紙の厚さより薄めの紙を選びます。補修したところが何枚も重なると、部分的に厚くなったり、色が濃くなったりするので注意して選びましょう。

(3) 作業手順

- ① 本紙を黒の下敷き布（習字用等）の上に裏を上にして置きます。
- ② 糊のつきが良いように埃を払い、虫の糞などを除去しておきます。
- ③ 虫食い穴の上に薄い透明なプラスチック板を置きます（クリアファイル程の厚さがあれば十分です）。本紙に水分がつくと染みになることがあるので、紙質を注意深く見ましましょう。
- ④ 繕い和紙のすの目（タテの線）と本紙のすの目を合わせて、水を付けた筆で虫食い穴の一、二ミリ外側の周囲をなぞり、指で徐々に切り取ります。このとき和紙で巻いた文鎮を使い、重ねたものが動かないようにします。筆を使うとき線を細く描かないと、虫食い穴の正確な形に切り取れないので注意しましょう。
- ⑤ 切り取った和紙の周囲の毛羽立ちを、右手の親指と人差し指を使い、きれいに整えます。
- ⑥ 虫食い穴を繕う方法は、大きく分けて二通りあります。
 - ・毛羽先に糊を内から外へと付けて、ピンセットで持ち穴を埋める。
 - ・本紙の虫食い穴の周囲に糊を細く付け、きれいに毛羽を立てた繕い和紙をピンセットで置く。細長い虫食いの

や、細く複雑な虫食い等はこの方法が適しています。

それぞれの利点や、どの方法で修復するべきかは、基本を学び地道に練習を積み重ねていく中で、自然と理解出来るようになるでしょう。

- ⑦ 糊付けしたら吸水紙を上置き、竹べらで毛羽にそって中から外へとなぞり、糊の水分を取りながら密着させていきます。
- ⑧ 繕いが済んだら板に挟み重しをかけておくと、皺も伸びてきれいな仕上がりになります。

(4) その他の工夫

a 指の入りにくい狭い部分に糊付けしたい時などには、「指し糊」という方法を用います。糊付けの道具には、写真のフィルムやクリアファイルなどを切って使います。

本紙を傷つけないように切り口の角を丸く整え、先端に濃い糊を二ミリほど線状に付けます。そのまま継ぎ目が外れている所に表から差し込み、吸水紙を上当て竹べらを使い滑らかに仕上げます。

線や絵が繋がっているか確かめてから、修復箇所が傷まないよう一枚和紙を当て、その上に板を載せ直し

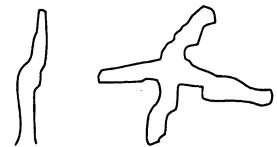


図 3

をかけて仕上げます。

b) しばん虫（和本を食って穴を空ける虫です）は、トンネル状に何枚も掘り進むのが特徴です。こうした単純な形の細長い虫食い穴は、大工道具の「墨さし」を使って、和紙のすの目に沿って虫食い幅に食い裂いたものを、何枚か作っておくと便利で効率よく修復できます。

練習を重ねることにより、指先や道具がうまく使えるようになり、そこから工夫も生まれ適切な修復が出来るようになります。再び命を吹き込まれた文献が、何百年と「保存と活用」に貢献していくことを思うと、「和紙と墨」の生命力の強さと共に限りない感動を覚えます。

4 題箋について

新しく表紙を作る場合、その表紙の大きさに合わせたバランスのよい題箋の寸法や、位置というものがありません。表紙に貼る位置等については、専門の手引書に記載されています。

多くの本を修復していく中で気づくのは、同じ半紙判の和装本でも、題箋の大きさや位置は様々だということです。

では、題箋の修復方法の例を記していきます。

① 題箋が取れて無いものは、よく観察すると表紙の色が少しあせている中に、題箋の型が周囲より僅かに濃く残り確認できることがあるので、それと同じ大きさに作りその位置に貼る。

② 本紙の中や見返しの中に題箋が挟まっていることもあるので、注意して下さい。もとの題箋がある場合には、表紙の虫食い穴と題箋の虫食い穴が一致するところを探し、元の位置を見つけてみます。

③ 題箋が表紙に残っている場合でも、題箋の四隅やごく一部に糊付けして済ませてあるものがあります。和装本は重ねて収納することが多いし、利用のことを考えても、破損しやすい状態にあることは間違いありません。さし糊をしてしつかり付けたほうがよいでしょう。

④ 新しく題箋を作る場合は、糊付けしたときに縮むこともあるので、和紙に一度霧をふき、乾かしプレスしたものを使います。

それ以外でも、修復前の本の状態には最大の注意を払い、必要な対処を考えます。たとえば文献の整理番号を記しているラベルが貼付されている場合、よく確かめて、ラベルの紙質が酸性紙の時には修復に際し、もし外すことが出来れば和紙で作り直す方がよいでしょう。